

北海道ニューリーダーネットワーク検討会議（第2回）

主な発言内容

1 参加者の条件について

- 個人や会社が事業として地域づくりに携わっている場合は、参加対象にすべきではない。地域づくりは、仕事外で行うものである。
- 地域を元気にするためには、既存の団体（商工会・農協・漁協等）の横の繋がりをつくれば良い。それだけで、目に見えて変わる。更にプラスアルファで既存の団体と個人で頑張っている方もつながる。既存の団体同士のネットワーク構築を行った上で、個人参加については、広域で行っているとか、町がその方の活動に関わっているとかある程度絞ってはどうか。
- 活動を持続させていくためにも、営利に繋がる場合があっても良い。地域の方達を巻き込みながら、地域に影響を与え続けていくような方であれば、地域リーダーとして認めても構わない。個人が儲かる等という視点で考えない方が良いのではないか。既存の組織の人や新たに影響を与え続けるような人達双方を巻き込めるような仕組みにしておけば良いような気がする。
- 社会を良くしようとか問題を解決することをボランティアではなく、ビジネスとして行っている方もいる。そういう方々も課題解決に新しいアプローチで取り組んでいる或いは挑戦しているという意味では、地域リーダーと言えるのではないか。
- 個人が営利目的で行っていても、地域がそれを必要としてくれているのであれば、その方は地域リーダーなのかもしれない。そういう方がネットワークに参加することにより、地域リーダーとして育っていく。個人だからどうということはない。
- 既存の団体に所属していない方も増えてきているので、既存の団体同士のネットワークに追加枠のような形で、そういった方達も入れてみてはどうか。

- 女性参加を促すため、クォーター制等を導入し、参加者の1/4を女性に限定する等してはどうか。
- 市町村が人選に困らないよう、具体的例示を提示する必要がある。
また、市町村の役割も明確にさせる必要がある。市町村がやりがいを
持てるような、担当者も面白がってくれるような仕掛けをつくることが
大切である。

2. 振興局単位と全道のネットワークの位置づけ等

- 例えば、商工会の会員であれば、商工会の活動を通じて、マチのこ
がわかっているので、振興局単位のネットワークで同じ環境の方々と話
をすることによって、お互いに吸収できることがある。その上で、全道
ネットワークで他の管内の状況を知るという手法の方が良い。振興局単
位のネットワークを飛ばして、直接、全道ネットワークに参加しても話
についていけないのではないか。

3. ネットワークの事業内容の改善点等について

- 振興局単位のプレゼン対象には、振興局長、各地域の大学の先生や市
町村長を巻き込んでどうか。それから市町村と振興局の役割分担を明
確にする必要がある。参加者は統一感がない、玉石混交みたいな集まり
になると思うが、それで良いではないか。そうした方々をうまく混ぜて、
その中で磨いて、刺激し合えば良いので、それも許容できるような懐の
広いやり方をしたほうが良い。
- プレゼンを誰にしてもらうかが重要で、さらにプレゼンする相手は地
域づくりを行っているメンバー同士なのか、北海道応援団会議等のメン
バーなのか。また、何かを提案して支援や協力を得る形にするのか。
そこを明確にしないと参加者のメリットが見えてこない。
- 振興局単位のネットワークでは、振興局長、市町村長や地域の企業の
方々に自分の取組或いは地域の状況を伝える機会があれば嬉しい。その
中から地域代表ということではなく、自分の取組や地域の状況について、
例えば知事等にアピールする機会を得る場ということで、選ばれた方が
全道ネットワークに参加する。全道ネットワークには、例えば、農協青
年部の全道の部長等も共に参加者としてメンバーに加わってもらっては
どうか。

- 全道ネットワークでは、例えば、リーダー達に政策提案を作らせ、その作業の中で結束を強めてもらい、ネットワークを構築してもらってはどうか。プレゼンも一つの方法であるが、「北海道の楽しい100人」や「ほっとけないアワード」等の民間の取り組みも参考にできる。
- 全道ネットワークの参加者は市町村や振興局単位のネットワークに参加する必要があり、すごく大変なので、どこに主眼を置くかを決めてはどうか。
- 全道ネットワークのグループ討議のテーマが「ネットワークの活性化に関する方策」で、ネットワークを存続させることが目的のようで面白味がない。何かテーマを設けて、みんなで一緒に取り組むことで結果的にネットワークが活性化していくようにしてはどうか。